

幸田露伴と近代中国知識人に関する試論 —「墨子」の受容を手掛かりに—

リョウ チンキ
梁 鎮輝（宇都宮大学大学院博士課程）

発表者はこれまで東アジアにおける思想交流史的な視点から、近代日本の文学者及び知識人を分析し、幸田露伴という人物に研究の力点を置いてきた。

従来の研究において露伴は、時に自然主義作家や尾崎紅葉の率いる硯友社と対照的な理想主義的作家のような単調な人物像として、時に東洋的の古典の世界にどっぷり浸かっている「反近代」的な人物像として描かれてきた。しかし、そのどちらも甚だ不十分であるという認識が発表者の研究の出発点である。

近代芸術家という狭隘な枠に収まらない露伴の思想世界を究明するために必要なのは、一つは軽視されてきた大正・昭和期の多彩なジャンル及び題材の文章を再検討することであり、もう一つは今まで言及されてこなかった彼の創作を支えた近代中国知識人の存在を明らかにすることである。

本発表は、この二つの方向に沿って、露伴が受容したと思われる清末民初の知識人を体系的に概観した上で、1929（昭和4）年に岩波講座『世界思潮』の第二冊として刊行された『墨子』に注目したい。

露伴の『墨子』は、単なる東洋古典としての再生産だけでなく、近代中国における墨子思想の再評価の社会的気運を汲み取り、近代日本の課題に適応させたものであると考える。1904（明治37）年に、梁啓超は『新民叢報』に「子墨子学説」及び「墨子之倫理学」の連載をし、さらに1921（大正10）年に『墨子学案』を刊行した。また、梁が参考にした胡適・章炳麟らも様々な形で墨子評価を行っている。そして、もちろんこれらの近代中国知識人の受容した西洋の

学問体系なども受容の射程内である。

「西洋」に近代化の道筋を模索する多くの近代文学者・知識人は前近代的な自我の部分と激しくせめぎ合う中、露伴は「露伴的方法」で前近代的な文人から近代的意味での知識人へ誰よりも軽やかに転身を図ったのではないか、と東アジア思想交流の歴史・文学研究のクロスした学際的手法で露伴研究における新たな視座を提示したい。

佐藤惣之助『琉球諸嶋風物詩集』における古琉球

許 圓圓 (広島大学客員研究員、黄冈師範学院助教、
北京語言大学博士課程)

1922年5月の末、佐藤惣之助(1890-1942)は鹿児島から沖縄へ船旅をした。最初那覇に到着し、その後慶良間諸島の祝女の家を訪ねてから詩を創り始めた。約六十日間かかって『琉球諸嶋風物詩集』を完成した。詩集には86篇が収録されている。その中の、「琉球島瞰圖」「女王の首」「首里王城」「古國月照」「舊王國譜」「古代琉球圖」などの詩には、古琉球の風情が描かれている。本発表では、佐藤が築いた古琉球の世界について論じる。「古琉球」は三山時代と第一尚氏と第二尚氏王統から薩摩の侵入(1609)までの時代を指す。

佐藤は琉球歌謡と琉球語を詩の中に用いている。その詩集の持つ独特なリズムは「おもろ」などから多く取り入れている点で高く評価される。一方、佐藤は単なる旅人として詩を書いていて、沖縄の人々の立場からではないという批判がある。先行研究をふまえて佐藤の詩が琉歌から受けた影響と琉球語の使用を分析する。

また、詩には「女たち」「女王」「女戦士」「女詩人」などが繰り返される。例えば、「舊王國譜」に「おのおの女詩人と女戦士たちを引つれて あたらしい島島の航海権を議すため」という一節がある。作者がなぜ古琉球を女の世界のようにつくりあげるのかを検討する。

それから、詩には古琉球の風情だけではなく、中国の情緒も漂っている。たとえば、「古國月照」には「人の眼に古風なランプをつけ影をつけ 影ばかりの人物をならべ、人物に胡弓をあたへ笛をあたへ」という一節がある。胡弓は中国の伝統楽器である。沖縄の楽器といえば、三線である。なぜ「三線」ではなくわざと「胡弓」を与えるのか。詩集には「支那風なる閑情」という詩も収

録されている。「支那風なる閑情」を鑑賞して詩集に溢れる中国の情緒を分析する。

村上春樹の〈変身〉 — 『恋するザムザ』論

ハヤシ ケイスケ
林 圭介（法政大学中学高等学校専任教諭）

村上春樹『恋するザムザ』は、チェコ出身のドイツ語作家フランツ・カフカ『変身』の「後日談」として書かれた*1。着目したいのは、村上がドイツ語の原典を読むことなしに、日本語に訳された翻訳を書き換えている点である。この村上のリライトが英語に訳され、世界の読者に読まれている。本発表の目的は、翻訳のリライトとその英訳という一連のプロセスを分析することで、原典と翻訳の関係を反転させ、日本語で世界文学を試みる村上の戦略を明らかにするところにある。

村上春樹は小説家であると同時に、翻訳者として多くの作品を手がけてきた。翻訳者としての村上の特徴はスコット・フィッツジェラルドやレイモンド・カーヴァーら現代アメリカ文学の紹介とともに、彼らの文学を村上の文体で置き換えた点に見出すことができる。発表者はこれまで村上によるJ・D・サリンジャーの新訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』に見られる手法が橋本福夫や野崎孝の既訳と異なり、“You”を「あなた」と置き換え訳注と脚注を駆使することでサリンジャーの作品を村上文学として書き直している点を明らかにしてきた*2。村上は短篇を中心とした自作の改稿とアメリカ文学の翻訳という二つのリライトを通して、村上文学の文体を作ってきたのである。

本発表がこれまでの研究と関連づけられるのは、英語を経ずに他の言語で書かれた文学を村上がいかにリライトしているのかを考察する点にある。村上文学は英訳をはじめ別の言語への翻訳で世界の読者に読まれている。それは村上文学がデイヴィッド・ダムロッシュの言う翻訳で豊かになる「世界文学」として読まれているということだ*3。村上文学はこの世界文学化への過程とは逆に、

翻訳で読まれる世界文学を村上文学化している。それがカフカの翻訳をリライトした『恋するザムザ』である。翻訳が原典になるという逆説から、世界文学の〈変身〉を企てる村上の試みを浮かび上がらせたい。

注

- *1 村上編訳『恋しくて—TEN SELECTED LOVE STORIES』中央公論新社、2013年。
- *2 拙論「村上春樹の新訳と三人のサリンジャー——『キャッチャー・イン・ザ・ライ』をめぐる」第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集会編『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』ココ出版、2014年。
- *3 デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』秋草俊一郎、奥彩子、桐山大介、小松真帆、平塚隼介、山辺弦訳、国書刊行会、2011年。

『鸚鵡返文武二道』のハンガリー語訳 — 黄表紙のエッセンスをどう伝える？

チェンドム アンドレア
CSENDOM Andrea (国際交流基金フェロー (中央大学))

黄表紙の外国語訳は少ない。管見の限りでは、西洋で翻訳されたものは英語とドイツ語のものしかない。ハンガリー語は英語ともドイツ語とも異なり膠着語なので、構造上は、日本語により近い形で翻訳できる。一方、日本人とハンガリー人の考え方の違いは大きく、単語や発想を翻訳し難いところが多い。実際翻訳してみると、次の疑問点が浮かび上がる。黄表紙の重要な要素である洒落、うがち、いき等を翻訳できるのか。内容を重視するのか、形式を重視するのか。価値観の違いをどう乗り越えるのか。

例えば、寛政の改革を揶揄した『鸚鵡返文武二道』(恋川春町作、寛政元年)の【12才】では匡房は次のように発言する。「檀那山人芸者衆、多くの中で、不佞を御選みは、有難山の鳶寛大」。さてこれをこの形式で、内容も伝えながら果たして翻訳できるのか。

また、洒落た言葉遣い以外にも多少問題となるところがある。その中でも、遊女をかならず登場させる黄表紙の「性」に関する見解が挙げられる。当時の江戸っ子にとって当たり前だった「いき」、その中で解釈・管理された「性」の概念だが、異文化の人々にとってどういう印象を与えるだろうか。そもそも「いき」という美的概念を言葉で説明する際、日本文化と全く関わりのない外国人に、「不思議」や「エキゾチック」と解釈されるのではなく、黄表紙の本来の要素である「笑い」を引き起こすように、どのように伝えれば良いのだろうか。

以上の疑問点に沿って、発表者の研究対象である寛政期の黄表紙と来年出版予定の黄表紙訳集の作成時に感じた疑問点を踏まえ、黄表紙の翻訳の一例を取り上げたい。翻訳方法を探り、現在の進行過程について発表していきたいと思

う。ハンガリー語はマイナーな言語であるため、本発表では方法論を紹介し、
実例を挙げる場合は現代日本語の直訳をつけることにする。

古典文学は世界遺産になりうるか — 日本研究と文化遺産学の学際的な試み

ジェルリーニ エドアルド
GERLINI Edoardo (早稲田大学文学学術院訪問学者、
ヴェネツィア・カフォスカリ大学研究員)

発表者は古典文学、和漢比較、世界文学といった分野で研究を進めてきた。2011～2013年に行った研究（日本学術振興会外国人特別研究員、於東京大学）では、平安朝文学と中世イタリア宮廷文学を比較することによって、両者の基盤となっている政治的・文化的な環境の共通点と相違点を明らかにした。2017年に行った研究（博報財団・国際日本研究フェロシップ、於国際日本文化研究センター）では、平安朝漢詩文と政治の相互的な役割を考察した。その主な結果は、宮廷環境で作られた文学作品は権力と緊密な従属関係にありながら、もっぱら政治に依存していたわけではなく、逆に権力者と君主の正統化に必要な資本でもあったということである。古典文学と政治の相関関係を考える場合、世界文学の概念をめぐる先行研究が参考になるが、発表者はそれに世界遺産・文化遺産学の研究を加え、新しい学際的なアプローチを試みたい。

世界遺産は、ユネスコによって制定された1972年から、世界中の国々に観光産業を支える経済的な利益をもたらし、国際社会に対するそれぞれの政権の正統化にも作用してきた。そして2003年には無形文化遺産という新しい文化遺産の категорияが定められた。それは言語、芸能、社会的慣習、儀式や祭礼行事、知識や工芸技術などの人間の伝統的な活動を含むものである。しかし、ユネスコによる有形・無形文化遺産リストの中には「文学作品」はない。能楽や歌舞伎は無形文化遺産と認証されたが、世阿弥や近松の台本そのもの、またその基盤となっている『源氏物語』や『平家物語』などの文学作品が認証されないのは、なぜか。以上の問題意識をもとに、「文学はデジタル遺産である」という

仮説を検討したい。また、遺産の「所有権 (ownership)」と作品の「オーサーシップ (authorship)」という概念を本研究のキーワードとして比較したい。

ポスターセッション題目

〈越境文学〉と〈日本文学〉

—— シリン・ネザマフィの「サラム」をめぐる ——

クローデル ソフィー
CLAUDEL Sophie (法政大学大学院博士課程)

絵入狂言本考 —— 台帳や役者評判記との比較から ——

タカハシ トシヒコ
高橋 俊彦 (埼玉大学大学院修士課程)

中国における日本近現代小説の受容研究：1972～1978年

ミョウ ホウカ
苗 鳳科 (中央大学大学院博士課程)

文語文を素材とした国際共修授業 —— 正岡子規『はて知らずの記』を読む ——

ムシアケ ミキ
虫明 美喜 (宮城教育大学特任准教授)

サトウ セキコ
佐藤 勢紀子 (東北大学教授)

水村美苗の『本格小説』におけるノスタルジア —— 『嵐が丘』との比較 ——

ミナモト トモミ
皆本 智美 (摂南大学外国語学部准教授)

『源氏物語』『紫式部日記』における仏教関連用例とそのデータ化

カスガ ミホ
春日 美穂 (大正大学教育開発推進センター専任講師)

コスゲ
小菅 あすか (國學院大學大学院博士課程)

タカクラ アキコ
高倉 明樹子 (國學院大學大学院博士課程)